

チャンス・チャレンジ・チェンジ

秋田県立養護学校天王みどり学園 加賀谷 勝



本で見つけた心に残る「言葉たち」



「自分の名前は最も気持ちのよい音(最も聞きやすい音)である」

- ・自閉傾向が強い子どもは、「みなさん」と呼んでも、自分のことだと気付かないときがある。また、子どもは好きなことに夢中になっていると、呼びかけに応じないときがある。
- ⇒こんなときは、子どもの目の前に行って、「〇〇さん」と名前を呼んでから、具体的な指示を出す。
- ⇒呼び名がコミュニケーションの質(関係性)を深める。人間関係は、名前を呼び合うことが本当の意味のスタートである。人間は親しみを込めて名前を呼んでくれる人に仲間意識をもつ。

「必ず成功体験で終わりにする」

- ・「早く片付けなさい!」「友達を叩いてはいけません!」と注意を与えて、そのままで終わることがある。叱りっぱなしにすると、叱られた嫌な経験だけが記憶に残って、子どもが自信をなくし、関係の悪化につながる。
- ⇒注意を与えた後、指示通りに行動したときは、「先生の約束を守ってくれたね」とほめる。最後はほめられた楽しい記憶で終了できる言葉の掛け方を工夫する。障害のある子どもは成功体験からプラスを学ぶが、失敗体験からはマイナスを学ぶ。成功体験の積み重ねが、「またやってみたい!」という意欲を高める。失敗体験のままで終わらせない。

「笑顔は言葉を越えた最高のコミュニケーションである」

- ・「～してはダメ!」とい否定的な言葉を使うと自然と表情は厳しくなり、注意を受ける子どもにも伝染する。
- ⇒肯定的な言葉を使うと、自然と表情は和らぐ。
- ⇒最も早く信頼関係を築く方法は、笑顔を見せることである。
- ⇒大人の笑顔が増えれば、子どもも笑顔になる。そして、子どもの心が満たされ、問題行動は減っていく。よい言葉を笑顔で!



「子どもは大人の言ったとおりにほしないで、大人のするとおりになる」(人はいつも見ている人に心が似てくる)

- ・私たちは、「早くしなさい!」「やめなさい!」と子どもに言うことが多い。子どもは言い付けどおりにできないが、大人の言い方や行動をまねる。
- ⇒やってほしいことを、消えてしまう言葉だけでなく、目で確認できるように提示する。
- ⇒大人がよい手本を示す。なっしてほしい子どもの姿を大人が自ら示す。
- ⇒子どもと上手につきあうコツは、子どもがなぞりやすいような振る舞いを、大人がしてみせること。そして「あんな先生になりたい!」と思ってもらうことが大切である。

「問題行動をなくすのではなく、適切な行動を増やす」

- ・私たちはどうしても子どものできない部分に目が向いてしまい、その欠点をなんとかしようと躍起になる。
- ⇒「できないこと」を口うるさく言うよりも、すでに「できていること」に注目して、一緒に喜んだり、認めてたりする。
- ⇒どうしたら子どもが望むことができるのかを教える。やめさせたいと思うよりも、何をやらせるかを考える。
- ⇒注意するときは、「〇〇してはいけない!、ダメ!」よりも、「〇〇しよう」と、大人のやってほしい行動を言葉にする。



「支援の成果 = 支援される人の気持ち × 支援する人の気持ち」

- ・学校と保護者・子どもの困り感が一致しないと、いくら支援をしても成果は期待できない。お互いが目標を共有しないと前に進まない。
- ⇒保護者も学校も子どもを「何とかしたい」という思いがある。その思いのカタチがを重ね合わせることが大切である。そのためには、「個別の指導計画」を作成して、思い・目標・手立て・ノウハウを共有する。そうすることで、支援の成果が上がっていく。

